

図2 【設計意図】の内容の相関図

2.3. 《内的要因》について

一方《内的要因》は、建築家独自の思考やイメージが有機的形態の根拠となるもので、創造性や純粹美などの観念的思考をはじめ、躍動感、崩壊や悲哀など多くのイメージがみられた。《内的要因》の【設計意図】は多種多様で大きなカテゴリーはみられないが、柔らかさや力強さ、芸術性、生命性などの小さなまとまりがみられた。

2.4. 《外的要因》と《内的要因》の関係

有機的形態の【設計意図】を《内的要因》《外的要因》の2側面から分類すると、〈建築的〉〈場所性〉において《内的要因》との重なりがみられた。それらの内容に着目すると、〈建築的〉-《内的要因》では、単に機能を満たす形態を求めめるのではなく、機能から喚起されたイメージに形態の根拠を求めるものなどがみられ、〈場所性〉-《内的要因》では、新しさや神秘性などを表現した形態がランドマークとなって周辺環境と関係するものなどがみられた。一方、形態生成の方法自体を根拠とする〈手法的〉は、観念やイメージの表現を根拠とする《内的要因》とは重複せず、それらは同時に意図されるものではないといえる。

2.5. 【設計意図】の通時的傾向

《内的要因》と《外的要因》の3つのカテゴリーのそれぞれの割合をみると(表3)、まず全体(1971-2004年)では〈場所性〉の割合が高く、有機的形態は環境特性との関係を根拠にする場合が多いといえる。次にそれぞれの年代をみると、1971-79年は〈建築的〉が多く、建築的な要求から有機的形態を意図する傾向にある。しかし1980-89年では《内的要因》の割合が高く、建築家独自の観念やイメージなどの表現が多くみられる。さらに、1990-99年、2000-04年には〈場所性〉が大きな割合を占め、建築の建つ場所や環境との関連の上に、有機的形態を構想する傾向にある。また、2000-04年には〈手法的〉もわずかながら増加している。これは、環境でも観念

* 株式会社岡村製作所
 ** 室蘭工業大学建設システム工学科講師
 *** 室蘭工業大学大学院

表2 【設計意図】の分類

《内的要因》		52	
〈建築的〉 60	[機能]	6	
	[空間]	15	
	[プログラム]	2	
	[構成]	3	
	[素材]	5	
	[構造]	3	
	[人間]	12	
	[採光]	5	
	[外観]	9	
	《外的要因》 178	〈場所性〉 96	[敷地の状態]
[周囲の建物]			5
[自然]			16
[都市]			19
[地形]			9
〈手法的〉 37		[周囲の変化]	5
		[その他]	3
		[文化・歴史]	19
		[気候]	6
		[他の物事を参考]	9
合計	[方法]	8	
	[既存概念]	9	
	[音]	5	
	[コンピュータ解析]	5	
	[その他]	1	
合計		245	

表2註) 合計数が異なるのは重複のため

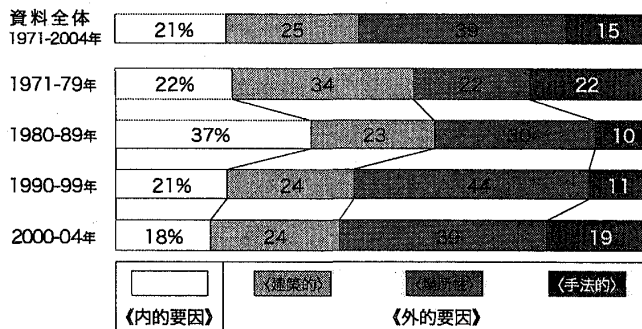


表3 【設計意図】の通時的傾向

でもなく、形態の生成プロセス自体が有機的形態の根拠となるもので、数は少ないが近年の特徴といえる。

3. まとめ

本研究では、現代建築における有機的形態の【設計意図】を建築家の言説から抽出し、分析検討した。その結果【設計意図】には《内的要因》と《外的要因》の2つの大きな側面がみられたことや、有機的形態の設計の根拠としては《外的要因》の〈場所性〉が多いこと、また《内的要因》は多種多様なものがみられること、さらに近年は〈手法的〉な【設計意図】が若干増加していることなどを特徴として捉えた。以上により、現代建築の有機的形態における【設計意図】の一端を明らかにすることができた。

註

- 1) 本研究では「有機的形態」を「3次元の曲面を有し、かつ単純幾何学ではない形態」と定義している。
- 2) 現代建築の一般的な建築誌のひとつである『a+u』の1971年1月号から2004年12月号までの34年分に掲載された、有機的形態を用いた建築作品の解説文を分析資料としている。
- 3) 資料とした117の「解説文」から210の【設計意図】が抽出された。
- 4) KJ法：川喜田二郎『発想法』(中央公論社)

* Okamura Corporation
 ** Lecturer, Dept. of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Muroran Institute of Technology
 *** Graduate school, Muroran Institute of Technology